

中学時代の母子関係ときょうだい関係の特徴が 自己制御機能の発達に与える影響

森下 正 康
(児童学科)

吉岡 紗 希
(児童学科10期)

本研究は、自己制御機能の発達について、中学時代の親子の信頼関係がきょうだい間の信頼関係を高め、それらが共に子どもの自己制御機能（自己抑制と自己主張）を高めるという仮説を中心に検討した。女子大学生を対象に質問紙調査を行い、記入漏れのない237名のデータを分析の対象とした。因子分析の結果、親子関係については「信頼関係」「対立関係」、きょうだい関係については「信頼」「対立」「分離」、自己制御については「情動抑制」「自己主張」「根気我慢」に関する因子が得られた。各因子に対応する尺度を作成し、信頼性を確認した。きょうだいのいる225名について仮説に沿ってパス解析を行った。その結果、中学時代の「親子の信頼関係」は、きょうだいへの「信頼」を高めると共に直接子どもの「根気我慢」を高めていた。さらに、親子の「信頼関係」はきょうだいの「分離」を低下させ、それを介して「情動抑制」を高めていた。したがって、仮説は部分的に支持された。それに対して、親子の「対立関係」は、「自己主張」を直接高めることが明らかとなった。さらに、分散分析の結果、きょうだいの有無やきょうだいの人数には有意差はなかったが、きょうだい関係の要因に交互作用があった。つまり、きょうだい間の「信頼」と「分離」が共に低い群は「自己主張」得点が高く、きょうだい間の「信頼」が低く「分離」が高い群は「情動抑制」得点が著しく低いということが明らかとなった。したがって、中学時代にきょうだいへの信頼が低い場合、きょうだいとのかかわりが多いと自己主張が高く、きょうだいとのかかわりが少ないと情動抑制が発達しないということが示唆された。

キーワード：自己制御，自己抑制，自己主張，親子関係，きょうだい関係

問 題

本研究において、きょうだい関係が自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかを明らかにしたい。きょうだいは、身近な他者として互いに影響し合う重要な存在である（岡崎・杉井，2004）。きょうだい関係は、親子関係（「タテの関係」）と友達関係（「ヨコの関係」）をつなぐ「ナナメの関係」であり（依田，1990）、個人の社会化を促すと共に、対人関係の基礎を形作る上で重要な役割を果たしていると考えられている（磯崎，2007）。

自己制御機能は、自分の意志や欲求を明確に持ち、これを他者や集団の中で協調的に表現す

るという自己主張と、社会的場面において必要な場合は自分の欲求や行動を抑制・抑止するという自己抑制の2側面からなり、これらがバランスよく発達することが望ましいとされる（柏木，1988）。

幼児期では、自己主張は3歳から4歳後半にかけて急激に増加し、その後はあまり変化がない一方で、自己抑制は3歳から6歳まで一貫して伸び続けるとされている（柏木，1988）。他方、森下（2003）によれば、幼児の横断的データの分析結果から、自己抑制は男女共に年中（4歳児）から年長（5歳児）にかけて発達すると考えられた。しかし、縦断的データの結果

は、年少、年中時に自己抑制は発達するが、年長時には発達がみられなかった。したがって、これらの結果を総合すると、年長児の自己抑制の高さは年長時の発達ではなく、年少・年中時の発達の積み重ねによるものと考えられる。他方、自己主張に関しては、横断的データによると自己主張は3歳以後は発達しないということを示していた。しかし、縦断的なデータでは3歳以降も自己主張は発達していた。したがって、発達という視点からは、同じ子どもの変化に視点を当てる縦断的なデータを重視しなければならないということが改めて浮き彫りとなった。

丸山(2009)によれば、幼児期から青年期後期にかけて、自己抑制は一貫して増加する一方で、自己主張は児童期から青年期前期において減少していた。このように、自己制御機能は幼児期から青年期を通して、環境との相互作用の中で変化するものと考えられる。

きょうだい関係は、親の養育態度の影響を受ける(森下・小嶋・河合, 1988)。親の養育態度の特徴が、子どもの自己制御に影響を与えることはすでに指摘されてきた(森下, 2003)。したがって、親子関係は子どもの自己制御機能の発達に直接影響すると共に、きょうだい関係を介して間接的にも影響するものとする。しかし、親子関係の特徴がきょうだい関係を介して自己制御にどのような影響を与えるかについての研究はこれまでみられない。

きょうだい関係は、すでに指摘されているように、親子のような縦の関係ではなく、仲間との関係と同じようなダイナミックな相互作用がみられ、その影響は親子関係をしのぐものがあるかもしれない。本研究においては、親子関係ときょうだい関係がどのような関連を持ちながら、子どもの自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかを明らかにしたい。また、どちらの影響の方が大きいかにも注目する。

きょうだいの特徴に関する研究において、依田・深津(1963)は二人きょうだいでの性格の違いがあることを指摘している。自己制御に関連するものとしてして、例えば、長子的性格は自制的であり話すより聞き上手、仕事が丁寧、

人前に入るのを嫌いひかえめであるのに対して、次子的性格は依存的でおしゃべり、嫉妬心が強く、強情で活発であるとしている。この研究では長子は自己抑制的だとされている。また、浜崎・依田(1985)は三人きょうだいにおいても同様に長子的性格と次子的性格があり、中間子的性格は突発的で気に入らないとすぐに黙り込むなどの自己抑制の低い特徴を挙げている。しかし、そのような長子的性格、次子的性格は認められないという指摘もある(岩井, 1995)。女子大学生を対象にした坂手(2013)の研究によれば、本人が自己の性格を評定した場合は、長子的性格や次子的性格というものはみられないということ、自分が年上のきょうだい(兄妹)や年下のきょうだい(弟妹)をどのようにみているかという評定では有意差があるということが分かった。したがって、きょうだいの性格については測定方法や視点の影響を受けると考えられる。

きょうだい関係と社会的発達に関して、柴田(2010)は、きょうだいとのコミュニケーション量が多い者の方が主張スキルを身につけていることを示唆している。きょうだいという身近な他者とのコミュニケーションの機会が自己主張を促進させると彼は考えた。また、幼稚園児について、山口・田中(2008)は、一人っ子は2～6人きょうだいに比べて、自己抑制的特徴が最も低いという結果を得た。彼らは、きょうだいの人数が多ければ多いほど、きょうだいの気持ちを察して自分の欲求を抑えるという場面を多く経験する、そのことにより自己抑制が発達すると考えた。

同じように、青年期の女子について、岡崎・杉井(2004)はきょうだい関係が分離的な方が、感情処理やストレスを処理する社会的スキルが少ないことを示した。そこで、きょうだい関係が分離的でなくて調和的である場合は、きょうだいとの間で良好な関係を維持するような働きかけがあり、他の人との関係においてもそのようなスキルを発揮することができるというように、きょうだい関係はそのための学習の場になっていると岡崎・杉井は考えている。自己制

御機能はこのような社会的スキルの重要な側面と位置付けることができ、きょうだい間の良好なかかわりの多さが自己主張や自己抑制の機能の発達に影響すると考えられる。

それに対して、一人っ子は3人きょうだいや長子よりも関係開始スキルの得点が高く、主張スキルについても、同じように高いという結果がみられた(相川, 2010)。つまり、これまでの研究結果とは異なり、きょうだいがなくてきょうだいとのかかわり経験のない一人っ子のほうが、このような他者とのかかわりや自己主張に関するスキルが高いというのであった。

このように、きょうだいの有無やきょうだい関係の特徴が自己制御機能に与える影響について実証的な研究は少なく、一貫した研究結果が得られていない。そこで本研究では、きょうだい構成だけでなく、きょうだい関係の特徴や親子関係の特徴が、自己制御能にどのような影響をあたえるかを明らかにしたい。

いつの時点の親子関係やきょうだい関係が自己制御機能の発達にどのような影響を与えるか、どこに焦点を絞るか難しい。さしあたり、比較的安定した特徴を示すであろう大学生の自己制御の特徴に焦点を当てた。また、きょうだい関係について、幼児期時点の特徴を明らかにすることは重要であるが、その測定は方法的に難しい。そこで、小学時代よりも比較的記憶が明確だと考えられる中学時代のきょうだい関係の特徴を学生自身に評定してもらうこととした。

すでに見てきた知見を参考にしながら、中学時代の親子関係の特徴がきょうだい関係の特徴にどのような影響を与え、それらが女子大学生の自己制御機能にどのような影響を与えるかという基本的な課題を設定し、次のような仮説を立てた。仮説1：親子の信頼関係がきょうだいの信頼関係を高め、それらが共に子どもの自己抑制と自己主張の発達にプラスの影響を与える。そのような場合、果たして親子関係の特徴ときょうだい関係の特徴のどちらのほうが、自己制御の発達に強く影響するかという点に注目する。

きょうだいのかかわりの多さは重要な要因で

あるが、単にかかわりの多さだけではなくかかわりの質が問題である。上記のようなきょうだい間のかかわりの多さ(分離関係の少なさ)は、きょうだいの信頼関係や対立関係とは別の次元(因子)であると考えられる。例えば、かかわりの多い場合に、きょうだいの信頼関係が高い場合と低い場合では自己抑制や自己主張の発達に及ぼす影響は異なるだろう。きょうだい間に親和的な相互作用が豊かな場合、その豊かな相互作用が自己抑制の発達と適度な自己主張の発達を促進すると考えられる。仮説2：きょうだいの信頼関係が高くきょうだい間のかかわりが多い場合は、自己抑制と自己主張の両方が高い。それに対して、信頼関係が低くきょうだい間のかかわりの多い場合は、自己主張だけが高く自己抑制は低い。

きょうだいのかかわりという点では、対立関係の強さもまた、自己制御の発達に影響する。松本(2013)によれば、女子大学生について小学生時代のきょうだい間の喧嘩の頻度の高い群や低い群は、中の群と比較して自己主張得点が高いということがわかった。この結果は、単に喧嘩の多さだけでは自己主張を説明できないことを示していた。また松本(2013)は、根気我慢は喧嘩の頻度とは関連はなく、むしろ喧嘩に対して、相互に理解させるような親の介入が根気我慢を高めるということを明らかにした。根気我慢のような特性には、単に自己を抑制するだけでなく、目標に向かって前進する自己主張的な側面も含んでいる。そこには、課題に一生懸命に取り組んで成功した経験の積み重ねから生じる自己効力感や、親からの評価や支援が影響しているだろう。本研究では、自己効力感のような要因について扱わないが、家族関係に限れば次のような仮説が考えられる。仮説3：親子やきょうだい間の信頼関係の中で、自己抑制や自己主張と共に、根気我慢も育まれる。

方法

- 1 調査対象 女子大学の学生258名を対象に質問紙への評定を求めた。その中から記入漏れのない237名のデータを分析した。年齢の

内訳は18歳63, 19歳96, 20歳以上78名であった。きょうだい数の内訳は表1の通りであった。

表1 きょうだい数の内訳

きょうだい数	0	1	2	3	4	総数
人数	12	147	68	6	4	237
(%)	(5)	(62)	(29)	(3)	(2)	

2 調査期間 2013年7月

3 手続き 授業中に質問紙を配布し、その場で回収した。個人的に依頼する場合は、後日回収した。

4 調査内容 質問紙は、回答者の属性(学部・学科、年齢)と、自己制御機能、親子関係、きょうだい構成・きょうだい関係に関する3尺度から構成した。

(1) 自己制御機能 田・吉澤・吉田(2008)の社会的自己制御尺度28項目(表1参照)について、普段の自分について「あてはまらない」「ややあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」の4件法で回答を求めた。

(2) きょうだい構成ときょうだい関係 まず、きょうだいの有無、きょうだい構成と年齢、および最も身近に感じるきょうだいについて記述を求めた。森下・山口(1991)、岡崎(2004)、飯野(1984)のきょうだい関係に関する項目を参考に、15項目(表5参照)を作成した。中学生時代を思い出してもらい、最も身近に感じるきょうだいについて「あてはまらない」「ややあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」の4件法で回答を求めた。

(3) 親子関係 きょうだい関係の尺度15項目を一部親子関係に適合するように表現を修正した。その尺度を用いて、中学生時代を思い出してもらい、母親(またはそれに代わる人)について「あてはまらない」「ややあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」の4件法で回答を求めた。

結果

1. 尺度を構成する因子

それぞれの尺度について因子分析を行った。まず、主成分分析を行い、スクリープロットと説明された分散の合計を参考に因子数を決定した。次に最尤法による因子分析を行い、プロマックス回転を行った(足立, 2006)。そこでどの因子にも負荷量が低い項目(原則として±0.30未満)がある場合はその項目を削除し、再度因子分析を行った。このような手続きを繰り返して最終的な解を求めた。得られた因子に対応する尺度の信頼性をみるために、 α 係数を算出した。各因子に高く負荷する項目の素点の和を求め、それぞれの尺度得点とした。

(1) 自己制御機能の因子

因子分析の結果、5因子が得られた。第1因子は、「嫌なことがあっても、人やものに八つ当たりをしない」「納得のいかないことがあったとき、すぐにかんしゃくを起こしたりせず、落ち着いて話すことができる」などの項目に負荷が高く「情動抑制」の因子と命名した。第2因子は「周囲の人と自分の意見が違っていても、自分の意見を主張する」「多数派の意見とは違って自分の意見を言う」などの項目に負荷が高く「自己主張」の因子と命名した。第3因子は「やりとおさなければならない仕事があるときは、どんな誘惑があっても最後までやりとおすことができる」「困難なことでも集中して取り組む」などの項目に負荷が高く「根気我慢」の因子と命名した(表1)。これらの因子に対応する尺度の α 係数を算出した結果、第1, 2, 3因子の値は比較的高かったが、第4, 5因子の値は低かったのでその後の分析には用いなかった(表2)。

(2) 親子関係の因子

因子分析の結果、2つの因子が抽出された。各因子に高く負荷する項目内容から、第1因子を「親子信頼関係」因子、第2因子を「親子対立関係」因子と命名した(表3)。各因子に対応する尺度の α 係数は表4に示すように比較的高い値であった。

表1 自己制御の因子と項目

- 第1因子 情動抑制
- 1 嫌なことがあっても、人やものに八つ当たりをしない。
 - 2 納得のいかないことがあったとき、すぐにかんしゃくを起こしたりせず、落ち着いて話すことができる。
 - 3 相手から不快なことを言われても、自分の感情を露骨に表したりはしない。
 - 4 自分の思い通りに行かないと、すぐに不機嫌になる。*
 - 5 自分がされて嫌なことは人にもしない。
 - 6 自分が気に入らない人には、つい過剰に注意をしたり、文句を言いすぎてしまう。*
 - 7 友達から間違いを指摘されたら、素直に自分が間違っていたことを認める。
 - 8 自分の考えだけを聞いてもらおうとするのではなく、相手の考えも聞いて、分かってあげようとする。
- 第2因子 自己主張
- 1 周囲の人と自分の意見が違っていても、自分の意見を主張する。
 - 2 多数派の意見とは違って自分の意見を言う。
 - 3 友達の考えに流されることなく、自分の考えを言うことができる。
 - 4 話し合いの場で、進んで自分の意見を述べる。
 - 5 たとえ言いにくくても、間違っていることは指摘できる。
 - 6 自分が考えていることを相手にわかるようにはっきり言う。
- 第3因子 根気我慢
- 1 やりとおさなければならぬ仕事があるときは、どんな誘惑があっても最後までやりとおすことができる。
 - 2 困難なことでも集中して取り組む。
 - 3 集団の中で、自分の決められた役割があるときは、どんな誘惑にも負けずに取り組む。
 - 4 皆でやるべき課題があるときは、遊びたい衝動に駆られても我慢できる。
 - 5 周りから決められた役割が困難なことでも、すぐにあきらめたりせず、我慢してやりとおす。

*逆転項目

表2 自己制御の各尺度の α 係数

第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
.784	.815	.696	.586	.551

表3 親子関係の因子と項目

- 第1因子 親子信頼関係
- 1 母親は私のことを理解してくれていた。
 - 2 悩みごとを相談した。
 - 3 お互いに意見を言い合った。
 - 3 あまり話をしなかった。*
 - 4 勉強や将来について話をした。
 - 5 一緒に何かをするということがなかった。*
 - 6 話が合わなかった。*
 - 7 お互いに関心がなかった。*
 - 8 異性の話をした。
 - 9 お互いを裏切らなかった。
- 第2因子 親子対立関係
- 1 ほとんど喧嘩をしなかった。*
 - 2 話をしているとすぐ喧嘩になった。
 - 3 お互いに批判し合った。
 - 4 叱られた。

*逆転項目

表4 親子関係の各尺度の α 係数

因子	1 親子信頼関係	2 親子対立関係
	.863	.752

表5 きょうだい関係の因子と項目

- 第1因子 きょうだい分離
- 1 あまり話をしなかった。
 - 2 一緒に何かをするということがなかった。
 - 3 お互に関心がなかった。
 - 4 話が合わなかった。
 - 5 お互いの行動に干渉しなかった。
- 第2因子 きょうだい対立
- 1 ほとんど喧嘩をしなかった。*
 - 2 話をしているとすぐ喧嘩になった。
 - 3 お互いに批判し合った。
 - 4 叱られた、あるいは叱った。
 - 5 お互いに意見を言い合った。
- 第3因子 きょうだい信頼
- 1 悩みごとを相談した。
 - 2 勉強や将来について話をした。
 - 3 異性の話をした。
 - 4 きょう代いは私のことを理解してくれていた。

*逆転項目

表6 きょうだい関係の各尺度の α 係数

因子	1 疎遠分離	2 対立関係	3 信頼関係
	.812	.792	.690

(3) きょうだい関係の因子

因子分析の結果、3つの因子が得られた。どの因子にも負荷量が低かった1項目を削除し、再度因子分析を行った。その結果(表5)、第1因子は、きょうだい間であまり話をせず、お互いに関心がなく、干渉しあうこともなく、疎遠で分離した関係を示す因子で、「きょうだい分離」因子と命名した。第2因子は、お互いに批判し喧嘩になることが多く「きょうだい対立」因子と命名した。第3因子は、きょうだいとよく話をし相談し、理解してくれたという「きょうだい信頼」因子と命名した。各因子に対応する尺度について α 係数を算出したところ、第1因子と第2因子の値は高く、第3因子の値は必ずしも高い値とはいえなかった(表6)。

各尺度の得点分布はすべて正規分布に近かった。

2. 変数間の相関とパス解析

それぞれの要因間の関連を明らかにするために、きょうだいがいる225名のデータについて尺度間の相関係数を求めた(表7)。親子の「信頼関係」と「対立関係」には低い負の相関がみられた。きょうだい関係については、「分離関係」と「信頼関係」には比較的高い負の相関がみられたが、それ以外のペアでは相関はなかった。自己制御については、「情動抑制」と「根気我慢」の間に低い正の相関がみられたが、それ以外のペアでは有意な相関はなかった。

親子関係の特徴ときょうだい関係の特徴が、子どもの自己制御にどのような影響を与えるかについて、総合的に明らかにするためにパス解析を行った(小塩, 2008; 豊田, 2007)。仮説に沿ってパスモデルを作成し、相関行列を参照しながら比較的高い負の相関のみられた「きょうだい分離」と「きょうだい信頼」に対して、親子関係以外に影響する共通の要因があると想定して、両因子の誤差間に双方向のパスを入れた。また、同じような理由から「情動抑制」因子と「根気我慢」因子の誤差間にも双方向のパスを入れた。パス解析により、有意でないパスを一つずつ削除しながら分析を行い、最終的に図1のようなパスモデルを得た。パス係数はすべて5%水準で有意であり、モデルの適合性の指標は高い値を示していた。

その結果、「情動抑制」に関しては、中学時代の「親子の信頼関係」が「きょうだいの分離」を低下させ、それを介して子どもの「情動抑制」を高めていた。「自己主張」に関しては、「親子の対立関係」が子どもの「自己主張」を直接高めていた。「根気我慢」に関しては、「親子の信頼関係」が「根気我慢」を直接高めていた。「きょうだい信頼」や「きょうだい対立」は子どもの自己制御に影響していなかった。

以上の結果をパス図のような説明変数の文脈の中で、親子関係やきょうだい関係の特徴の影響に焦点を当てると、次のようにまとめられる。
① 中学時代の「親子の信頼関係」は、「きょう

表7 親子関係, きょうだい関係, 自己制御間の相関係数

相関	親子信頼	親子対立	分離	対立	信頼	情動抑制	自己主張	根気我慢
親子信頼関係	—	-.139*	-.193**	.049	.276**	.034	-.069	.297**
親子対立関係	-.139*	—	.090	.089	-.084	-.148*	.133*	-.097
きょうだい分離	-.193**	.090	—	-.003	-.585**	-.199**	.009	-.147*
きょうだい対立	.049	.089	-.003	—	-.016	-.063	.085	-.058
きょうだい信頼	.276**	-.084	-.585**	-.016	—	.181**	-.052	.139*
情動抑制	.034	-.148*	-.199**	-.063	.181**	—	-.037	.282**
自己主張	-.069	.133*	.009	.085	-.052	-.037	—	-.016
根気我慢	.297**	-.097	-.147*	-.058	.139*	.282**	-.016	—

*p<.05 **p<.01

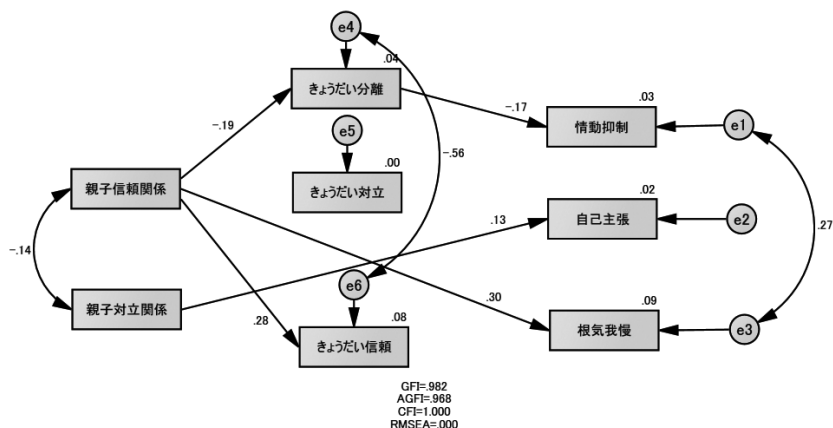


図1 親子関係—きょうだい関係—自己制御のパス図

だい信頼」を高め、さらに子どもの「我慢根気」を直接高めていた。また、「親子の信頼関係」は「きょうだい分離」を低下させ、それを介して子どもの「情動抑制」を高めていた。②それに対して、「親子間の対立関係」は、きょうだい関係には影響せず子どもの「自己主張」を直接高めていた。③「きょうだい分離」は子どもの「情動抑制」を低下させていたが、きょうだいに関する「信頼」や「対立」因子からは有意なパスはみられなかった。

中学時代の親子関係やきょうだい関係からの説明率は「情動抑制」については4%、「我慢根気」については9%、「自己主張」については2%と低い値であった。

3. きょうだい関係要因の交互作用

きょうだいの有無ときょうだい数を独立変数とし「情動抑制」「自己主張」「根気我慢」をそれぞれ従属変数として分散分析を行った。いずれの分析においても有意差は得られなかった。

パス解析では、要因間に交互作用がある場合にはその結果がパスに反映されないことがあるので、分散分析を行い有意な交互作用に注目した。親子関係の二つの尺度について、それぞれ得点の中央値をもとに得点の高い群（H群）と低い群（L群）に分け、それらを組み合わせて2要因の分散分析を行った。その結果、有意な交互作用はみられなかった。同じようにきょう

だい関係の3尺度について、二つずつ組み合わせて同じような分散分析を行ったところ、次のような交互作用がみられた。

(1) きょうだい信頼・分離と自己主張

「きょうだい信頼」と「きょうだい分離」を独立変数、自己主張の尺度得点を従属変数として分散分析を行った。その結果、交互作用が有意な傾向を示したため Bonferoni の方法によりその後の検定を行った（石村，2006）。その結果、図2に示すように「きょうだい信頼」L群において、「きょうだい分離」L群の方がH群よりも得点が高いという傾向があった。また、「きょうだい分離」L群において、「きょうだい信頼」L群の方がH群より自己主張の得点が高いに高かった。つまり、きょうだいの信頼と分離が共に低い群は他の群と比較して自己主張得点が高いことを示していた。

(2) きょうだい信頼・分離と情動抑制

同じような分析の結果、「情動抑制」についても交互作用がみられた（図3）。その後の検定を行ったところ、きょうだい「信頼」L群において、「分離」H群の方がL群よりも有意に情動抑制得点が低かった。また、きょうだい「分離」H群において、「信頼」L群の方がH群よりも情動抑制の得点が高いに低かった。つまり、きょうだい信頼が低きょうだい分離が高い群は、他の群と比較して情動抑制得点が著しく低いということが明らかとなった（図3）。

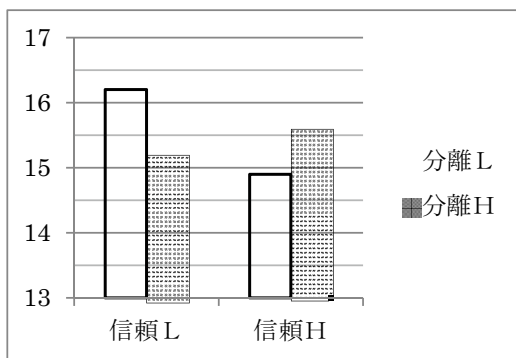


図2 きょうだい関係と自己主張

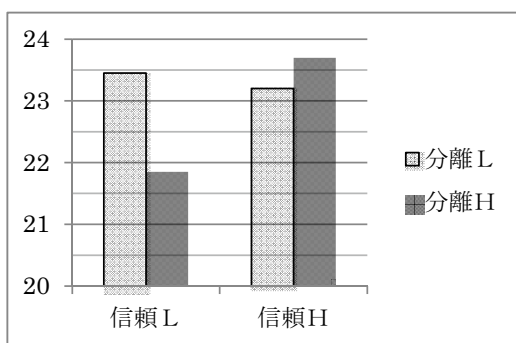


図3 きょうだい関係と情動抑制

考察

女子大学生を対象として、きょうだいの有無、およびきょうだい数を独立変数とし「情動抑制」「自己主張」「根気我慢」をそれぞれ従属変数として分散分析を行った。その結果、いずれの分析においても有意差は得られなかった。したがって、単にきょうだいの有無やきょうだい数が、自己制御機能に影響するというような単純なものではないということが示唆された。

続いて、中学時代の親子関係ときょうだい関係の特徴に焦点を当て、それらがどのように関連しながら、子どもの自己制御機能の発達に影響を与えるかを明らかにすることを中心に分析を行った。パス解析の結果、適合性の比較的高いパスモデルが得られ、①中学時代の「親子の信頼関係」は、「きょうだいの信頼関係」を高め、さらに子どもの「我慢根気」を直接高めていた。また、「親子の信頼関係」は「きょうだいの分離関係」を低下させ、それを介して子

もの「情動抑制」を高めていた。②それに対して、「親子間の対立関係」は、きょうだい関係には影響せず子どもの「自己主張」を直接高めていた。③「きょうだいの分離関係」は子どもの「情動抑制」を低下させていたが、それ以外のきょうだいの「信頼関係」や「対立関係」からは有意なパスはみられなかった。

上記のように、親子の信頼関係はきょうだいの信頼関係を高めきょうだいの「分離関係」を低下させることが分かった。つまり、親子間の信頼が、きょうだいへの信頼を高め、きょうだいとの関わりを増やしている。したがって、親子の信頼関係は、きょうだいへの分離関係を低下させきょうだいへのかかわりを多くさせるということから、身近な人への接近やかかわりを支える基盤となっているものと考えられる。

そのような親子の信頼関係は、子どもの「根気我慢」を直接高めており、最後までやり通すという機能は親子の信頼関係に支えられていると考えられる。これは仮説3を支持する結果であった。このような結果は森下・前田（2015）の研究における、母親の受容的な態度が子どもの根気我慢を高めるという結果と一致していた。

また、親子の信頼関係はきょうだいの「分離関係」を低下させることを介して、「情動抑制」を高めていた。その反対に、きょうだいの分離関係の高さは情動抑制を低下させるということであり、きょうだいかかわりの少なさや「情動抑制」を低下させるということを示唆している。したがって、きょうだいかかわりの重要性を指摘した山口・田中（2008）の研究結果と一致している。

「根気我慢」と「情動抑制」は正の相関あったので、親子の信頼関係は直接的にも間接的にも自己抑制的な機能を高めると考えられる。したがって、親子の信頼関係に関して仮説1は部分的に支持されたと考えられる。しかし、きょうだいの信頼関係からは、子どもの自己制御のいずれの因子にも有意なパスがなく、パス解析の結果では親子間の信頼関係の方がきょうだいの信頼関係よりも影響が大きいように見える。

親子の対立関係はきょうだい関係には影響を

示さなかった。しかし、親子の対立関係は情動抑制や根気我慢には影響しないが、子どもの自己主張を高めることが分かった。その理由として、親子が対立している場合、親の理解を求めて子どもが主張しなければならない場面が多くなることが関連していると予想される。また、対立関係の中で親への感情的な反発や反抗としての自己主張が生じると考えられる。

すでに述べたように、独立変数間に交互作用がある場合はパス解の析結果に反映されない可能性がある。そこで分散分析を行った。その結果、きょうだいの「信頼関係」が低く「分離関係」も低い群は他の群より「自己主張」得点が高かった。つまり、きょうだい間の信頼関係が低いけれどきょうだいのかかわりが多い場合、子どもの自己主張が多いという結果であった。きょうだい間のかかわりの多い中での信頼関係の低さは、自己主張を高めると考えられる。これは仮説2を部分的に支持する結果であった。

それに対して、「信頼関係」が低く「分離関係」が高い群は他の群と比較して「情動抑制」得点が低いということが明らかとなった。きょうだい間の信頼関係が低くてきょうだいとのかかわりが多い場合に、自己抑制を低下させるといふ仮説であったが、そうではなくて、むしろそのようなかかわりの少ない場合に、情動抑制が低いという結果であった。きょうだいとの間で情動を抑制する機会や経験が少ない場合は、情動を抑制する動機も育ちにくいと考えられる。それとは反対に、きょうだいの信頼関係が高い場合やきょうだいとのかかわりが多い場合は、情動を抑制する機会や動機が強くなり、むしろ情動抑制機能が発達するのかもしれない。

以上の結果から、きょうだい間の分離（かかわりの少なさ）と信頼関係のパターンの特徴が、子どもの自己主張や情動抑制に影響しているということが示唆された。このような結果は、パス解析の結果には反映されなかったといえる。したがって、親子関係の影響の方がきょうだい関係の影響よりも大きいということではできない。親子関係もきょうだい関係も同じように自己制御の発達に影響していることが示唆された。

本研究では、中学時代の親子間の信頼関係の特徴やきょうだい関係の特徴に焦点を当て、それが女子大学生の自己制御機能の発達に及ぼす影響について調べた。しかし、その影響は、説明率をみるとそれほど大きいものではなかった。これまでの研究で、親からの影響として、親子の信頼関係と共に、自己制御機能を育てようとする直接的あるいは誘導的な親からの言葉かけの影響もみられている（森下・藤村，2013；森下・前田，2015）。そして、そのような言葉かけの背景には親の養育態度の影響があることが推測された（森下・藤田，2012；森下・前田，2015）。また、親子の相互作用の中で親は情動抑制等のモデルになっている可能性がある（田中，2009；森下，1996；森下・福井，2014）

ある時点で子どもの特徴は、それ以前の遺伝要因と環境要因の相互作用の基盤の上に成立している。また、その時点での子どもの特徴はそれ以後の遺伝と環境の相互作用のあり方に影響する（小嶋，2001）。このように、その相互作用の影響は連鎖していく。自己制御機能は、初期の段階では親やきょうだいとのかかわりの中で、やがて小学校や中学校時代は仲間等とのかかわりのなかで発達すると考える。本研究はそのような研究の一環であったので、ある時点での親子関係やきょうだい関係の特徴のみで、自己制御の発達の多くを説明することは無理だということが示唆された。いつの時点のどのような経験が、どの時点での自己制御の発達に影響するかについて総合的に明らかにすることが、今後の重要な課題である。そのために、研究対象として女性だけでなく、男性をも含めた、広くきめ細かい追跡的な研究が必要だろう。

さらに、自己制御の発達にとって、他者との相互作用だけが重要ではない。すでに述べたように、根気のように最後までやり通すという機能をも包含した自己制御機能は、さまざまな課題に取り組み達成したり失敗したりする経験のなかで発達すると考える。そのプロセスにおいて自分自身の経験や情動体験が、自己効力感の形成に影響し、そのような自己効力感も自己制御機能を支えていると予想される。このように

自己制御機能の発達には、さまざまな経験や要因が関与しており、それは園原（1980）が指摘するように、発達の中心課題としての機能連関や発達連関の問題である。たいへん難しい課題であるが、このような視点から、すでに自己制御機能をも含む多くの変数を扱った追跡的研究が、河合・難波・佐々木・山川・山本（2013）によって進められている。今後の成果を期待したい。

引用文献

- 足立浩平（2006）. 多変量データ解析法—心理・教育・社会系のための入門—. ナカニシヤ出版.
- 相川充（2010）. きょうだい構成が子どものソーシャルスキルの程度に与える影響. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, **61**, 91-104.
- 浜崎信行・依田明（1985）. 出生順位と性格(2): 3人きょうだいの場合. 横浜国立大学教育紀要, **25**, 187-196.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和（2008）. 社会的自己制御（Social Self-Regulation）尺度の作成. パーソナリティ研究, **17**, 82-94.
- 飯野晴美（1984）. きょうだい関係—青年期の2人きょうだい—. 日本心理学会第48回大会発表論文集, 558.
- 石村貞夫（2006）. SPSS による分散分析と多重比較の手順（第3版）. 東京図書.
- 磯崎三喜年（2007）. 出生順位と性がきょうだい関係の認知と自己評価に及ぼす影響. 社会科学ジャーナル, 203-220.
- 岩井勇児（1995）. 2人きょうだいの修正順位と性格（続報）: 長子的性格, 次子的性格への疑問. 愛知教育大学研究報告, 教育科学, **44**, 91-100.
- 柏木恵子（1988）. 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に—. 東京大学出版会.
- 小塩真司（2008）. 初めての共分散構造分析: Amos によるパス解析. 東京書籍.
- 河合優年・難波久美子・佐々木恵・山川紀子・山本初実（2013）. 幼児期における行動抑制の発達の变化(1)(2). 日本教育心理学会総会発表論文集, **55**, 499-500.
- 小嶋秀夫（2001）. 心の育ちと文化 有斐閣.
- 丸山愛子（2009）. 自己調整能力の発達に関する大学生の自己認知～幼児期から青年期後期までの自己主張・自己抑制行動の自己評定から～. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部, **58**, 73-80.
- 松本瑞穂（2013）. 小学生時代のきょうだいげんかが大学生の社会的スキルに及ぼす影響. 京都女子大学発達教育学部児童学科平成24年度卒業研究抄録集, 175-176.
- 森下正康（1991）. 大学生のパーソナリティときょうだい関係. 日本教育心理学会総会発表論文集, **33**, 395-396.
- 森下正康（1996）. 子どもの社会的行動の形成に関する研究: 同一視理論とモデリング理論からのアプローチ. 風間書房.
- 森下正康（2003）. 幼児の自己制御機能の発達研究. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, **13**, 47-56.
- 森下正康・小嶋秀夫・河合優年（1988）. きょうだい関係の展開(1) こども間のかかわり. 日本教育心理学会総会発表論文集, **30**, 298-299.
- 森下正康・藤田のゆり（2012）. 母親の言葉かけの特徴と食卓の雰囲気や児童の自尊感情と他者受容におよぼす影響. 京都女子大学発達教育学部紀要, **8**, 117-125.
- 森下正康・藤村あずさ（2013）. 小学生の頃からの言葉かけが女子大学生の自己制御機能の発達に与える影響. 京都女子大学発達教育学部紀要, **9**, 125-134.
- 森下正康・福井えがお（2014）. 母親の情動表現スタイルが女子大学生の情動表現スタイルと自尊感情や自立心に与える影響—母子の信頼関係を媒介として—. 京都女子大学「発達教育学研究」, **8**, 21-30.
- 森下正康・前田百合香（2015）. 児童期の母親の養育態度と誘導方略が女子大学生の自己制御機能に与える影響. 京都女子大学発達教育学部紀要, **11**, 99-108.
- 岡崎有理子・杉井順子（2004）. 青年期のきょうだい関係が社会的スキルおよび自尊感情に与える影響. 奈良教育大学紀要, **53**, 231-238.
- 柴田利男（2010）. きょうだいとのコミュニケーションが幼児の社会的認知の発達に及ぼす影響. 北星学園大学社会福祉学部北星論集, **47**, 1-10.
- 坂手千夏（2013）. きょうだいの性格の違いについて—きょうだい構成と親の態度に着目—. 京都女子大学発達教育学部児童学科平成24年度卒業研究抄録集, 163-164.
- 園原太郎（1980）. 認知の発達. 培風館.
- 田中あかり（2009）. 母親の情動表現スタイルが幼児の気質に及ぼす影響. 発達心理学研究, **20**, 362-372.
- 豊田秀樹（2007）. 共分散構造分析 [Amos 編]. 東京書籍.
- 山口順子・田中理絵（2008）. きょうだいと子どもの社会的発達に関する研究. 研究論叢第3部 芸術・体育・教育・心理, **58**, 193-203.
- 依田明（1990）. きょうだい関係の研究. 大日本図書.
- 依田明・深津千賀子（1963）. 出生順位と性格. 教育心理学研究, **11**, 239-244.